



ギャルと委員長に搾精される話

通勤中のバスに乗り込んできた

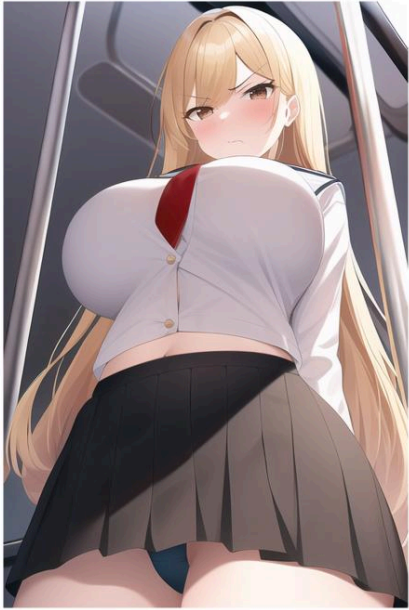
R18



エロバトルンノベル



登場ヒロイン



金髪ギャル

主人公にやたら絡んでくる
爆乳ギャル。
名前もわからないが
エロテクは最強。

黒髪委員長

ギャルとのエロ行為を
注意する爆乳風紀委員長。
名前もわからないが
実はうらやましいだけ。



1. 出勤中のバスで、巨乳ギャルにからまれてパイズリ搾精される朝。

「発射します～次は、女学園寮前～。女学園寮前～お降りの方はお知らせください」

ふう……なんとか間に合った。

新しい引っ越し先から、会社までの通勤手段のバスに初めてのりこんだ。

「……人が誰も乗ってない……よし！会社までゆっくりできるぞ！」

俺は、バスの一番後ろの窓側に座ることにした。

静かな車内。心地いい揺れにしばらく眠ろうかと思っていたのだが……

「女子寮前～女子寮前～停車いたします」

プシュ……ガコンツ

「えーマジで♥」「やっぱー♥」

次の停留所に突いたとたん、にぎやかな女性たちの声に俺のひとときの安らぎは妨害されるのだった。

「はあ……せつかく一人でのんびりできると思ったのに……ん？女子寮前？女の子たちと通学時間がかぶるのか……」

窓の外にある停留所の文字を見つめて、入ってくる女生徒たちのほうを見た。

ガヤガヤガヤガヤガヤ……きゃっきゃ♥……

「え？ちょ！？なんでこんなに！？」

空車だったバスの中が、満員電車並みに女生徒たちでいっぱいになった。

「まずい……これは降りれないだろ……うっかり触ったら痴漢と間違われる……」

よりもよって、バスの一番後ろの端に座ってしまったし……どうしよう。

そんなことを考えていると……

「えーサイアク……アタシの席が、盗られてるんだけど～」

いつのまにか、俺の横に立っていた金髪ギャルが俺を見下してにらんでいた。

下から見上げる金髪ギャルの南半球おっぱい。

短い制服のせいで白い素肌とおへそ、それに黒いパンツがはっきり見えている。

「おじさん、そこアタシの席なんだけどーどっか行ってくんない？」

「は？え？だってここ俺が先に座って……」

おそろおそろ言い返すと、大きいため息をついたギャルは腕組みして、巨乳をいや、爆乳と言っていいほどのおっぱいをむにゅり♥と持ち上げる。

「アタシは毎日そこに座ってんの！おじさんこのバス初めてだよね？だったらアタシに席ゆずってよ！」

可愛い顔してるけど、めちゃくちゃだこいつ……

ギャルは怖いけど、ムカついた！

「し、知らねーよ！今日は、俺がここに先に座ったの！それにおじさんなんて年じゃないから！」



「ちっ……なんなのよ……朝からついてないなあ」

そう言って、金髪ギャルは俺の横にドカッと座った。

こ、こえー。今のギャルってこんな感じなんだ……会社まで寝たふりしてやりすごそう……

そう思っていたのだが……

むにゅ♥むにゅ♥むにゅり♥

俺の右の腕にやわらかな感触が……

「ん……んうう♥」

「はえ！？おっぱいが腕を挟んでますよ！？」

横に座った金髪ギャルが、即行で寝落ちして俺の右腕にもたれかかっているのだった。

「うう……どうりでさっきから、やわらかくて温かいと……あー、ヤバイな……」

「はあ……ん♥やだあ♥やめてよお♥」

寝ている顔が肩にもたれかかっている。耳元でやたら色っぽい寝言つぶやいてるし……リアルASMRじゃないか！

「んう♥ちよっとお……おっぱいさわんないでよお……」

「は！はい！すみません！」

「んうう♥……むにゃ……」

「なんだよ！寝言かよ！クソ……びびらせやがって……」

しかし、ほんといい身体してるよなコイツ……巨乳というより、爆乳と呼べるほど大きいおっぱい。



短い制服をパツツンパツツンに見せる太もも。むっちりとした肉付きのいい身体にくせに.....寝ている顔はあどけない女の子なのが.....

「やば、ちんぽ.....立ってきた.....」

人生でこんなに可愛い女の子と、至近距離で触れ合ったことなかったから！

そう、これは生理現象であって、けっして痴漢とかそういうんじゃないから！

やばい……やばい……勃起がおさまらん……こんなの見られたら……

「ん♥……はっ！ヤバ……おじさんの横で寝ちゃった……いたずらされちゃ……え？」

ギャルの視線が俺のちんぽに釘付けになる。

「お、おはよう……よ、よく寝てたね」

できるだけ、さわやかに無害そうに声をかけるけれど……

「ち、痴漢むぐっ！？」

叫ぶ寸前であわてて、ギャルの口を押える。

「ち、ちがうんだ！これは生理現象であって、俺がキミに何かしたわけじゃなくて！むしろキミのおっぱいが俺を勃起させたんだよ！責任取るのはむしろキミのほうなんだ！わかる？わかるよね？OK？」

鬼気迫る俺の紳士的な説得で、コクコクと顔を真っ青にしたギャルがうなづいてくれる。

「よかった……わかってくれたんだね……」

俺が、手をはなした瞬間。

「よし♥バッチリ撮れてる♥」

ギャルは手に持っていたスマホの画面を俺に見せつけてきたのだ……

そこには、ちんぽを勃起させた俺が、ギャルの口をふさぐ動画が映っていた。

「あーあ♥こんなひどいことされちゃった♥どうせキニン取ってくれるのかなあ？」

「え？え？どういうこと！？」

まずい……こんなことがバレたら……即解雇、いや逮捕される！

「やっぱ♥おじさん必死じゃん♥ウケるんだけど♥」

動画を見ながら、爆笑するギャル。

「た、たのむ！その動画消してくれ！お願いだ……この通り！」

俺は小声で、必死にギャルに頭を下げる。

「んー♥どうしよっかなー♥でもおじさん……おちんぽまだ勃起させてるじゃん♥ほんとに反省してるわけ？」

ビク！ビクビク！

「こ……これは生理現象であって……そんなキミにやらしいことしようなんて思ってるわけじゃ！ああああ♥」

チ————ツ

金髪ギャルはズボンのファスナーをさげて、俺のちんぽをあっさり外へ出してしまう。

「ヤバイ！ヤバイ！なにしてんだよ！」

「え？苦しそうだから抜いてあげようと思って♥アタシってば優しすぎー♥はあん♥ちゅぽ♥」

「うひ！？」

軽いノリで俺のちんぽをくわえこむギャル。

まずい！まずい！まずい！

「ちゅぽ♥ちゅっぱ♥ちゅぷ♥♥♥ちゅぽ♥んふ♥おじさんのちんぽピクピクって♥
ほしがってんじゃん♥かわいい♥ちゅ♥」

容赦なく俺のちんぽをしゃぶるギャル。

「あ♥ああ♥やめてくれ、こんなの人に見られたら……」

隣にいる、生徒たちは話に夢中でまだ気づいてはいないけど……

「んもう！こんな美少女がフェラチオで朝抜きしてあげてんだからさあ……素直によろこびなよ♥♥♥はあん♥♥♥ちゅぷ♥ちゅぽちゅぽ♥」

ぐちゅ♥ぐぽぐぽ♥♥♥ぐぴゅ♥♥♥ちゅぽちゅぽ♥♥♥ぐぴゅ♥♥♥

「うう……たしかにすげえ……吸い付きやば……じゃなくて！こんなのはバレたら社会的に終わるから！あひ♥」

ちんぽを離そうとする俺を逃がしてくれないギャル。

「ぐぴゅ♥んふふ～♥スリル満点でしょ？ほらほら♥さっさとイっちゃったほうがいいんじゃない？ちゅぽ♥ちゅぷ♥♥♥」

ちんぽを軽くシゴきながら、ニヤリと笑うとさらにのどの奥までちんぽを飲み込みやがった。

ぐぴゅぐぴゅ♥♥♥ぐぽぽぽ♥♥♥ちゅっぷ♥♥♥ぐぴゅぴゅ♥♥♥

「あああああああ！やばい！やばい！やばい！」

「あははははは♥やだあ！うそでしょ～」

ビクッ！

突然聞こえた、前の席に座っている女子生徒の笑い声に、腰が跳ね上がる。

「んふうううう♥♥♥んびゅ♥じゅっぶ♥ぐぽ♥静かにしなきゃバレちゃうよ？」

「は、はい……」

「んふふ♥素直でよろしい♥♥♥」

ちゅぴゅ♥ちゅるちゅる♥ちゅぴゅる♥♥♥

ギャルの舌が裏筋をやさしく、なめあげてくる。

「やばい……あ……ああ……イカされちゃう」

そんな俺の顔を見たギャルが、ちんぽを口にくわえたままニヤリと笑う。

ぐぴゅ♥ぐっぐ♥ぐぽぽぽぽおおお♥♥♥ぐっぽお♥ぐぴゅぴゅぽおお♥♥♥

「やば！ やばいって！ また！ そんな口でシゴかれたら！ マジでイク！」

通勤中のバスのなかで、名前も知らないギャルにフェラチオされて射精しまうなんて！

「んふふ♥いいよ♥おじさん♥派手にイっちゃいなよ♥ほおら♥これでラスト♥はぶう♥んぐ♥んびゅちゅぶ♥♥♥♥」

ぐぴゅぴゅぴゅ♥♥♥ぐぽぐぽ♥♥♥ぐぴゅる♥♥♥ぐっぽぐっぽ♥♥♥ぐぽぽぽおお
おお♥♥♥ちゅ♥ぶりゅ♥♥♥ぐぽぐぴゅ♥♥♥ぐぽぽおおおお♥♥♥♥



「イク！イク！イク！ああああ.....だすぞ！お前が！おまえがこんなことするから！イク！射精する！ああああああ♥♥♥♥♥イク！」

「ふぐ！？んぐううううう♥♥♥♥♥」

ぐびゆるるるる♥♥♥どくどくどくう♥♥♥ぐぶぐぶううう♥♥♥どくどく♥♥♥ぐぶびゆる♥♥♥

ギャルの頭を押さえつけて、一滴も外に出さないように口のナカに射精した。

「はあはあ……はあ……うう……まだ、出てる……クソうますぎだろ……」

ぐびゆ♥どくどくん♥ぐびゆる♥♥♥

全部でおわるまで、ちんぽを抜かずにギャルの頭を掴み続ける。

「んぶうう♥♥♥ふぐうううう♥♥♥」

鼻から精液だしながら苦しんでいやがる……へへ♥

「おい……ぜんぶ飲めよ……臭いでバレるだろ……」

俺の言葉にコクコクとうなづいて、ギャルは口にたまったザーメンをコクン♥コクン♥と飲み干していく。

「んぷはあ♥♥♥もう♥おじさん出しすぎ♥でもほらあ見てえ♥♥♥」

ああーん♥♥

ギャルは口を大きくあけて見せる。

唾液と精液が糸を引き、舌のうえで少し残ったザーメンがふるふる揺れていた。

「やば……口のナカ……エロすぎだろ……」

「んふふ♥ぜーんぶ飲んだよ♥おじさんすっごい溜まってたんだね♥精液濃すぎ♥」

耳元でつぶやきながら、また俺のうでをおっぱいで挟んできやがる。

「クソ……うますぎる……彼氏のちんぽ毎日しゃぶってるんじゃないか……このビッチめ！」

「んちゅっぱ♥♥♥そんなことないよ……」

ギャルの巨乳がムニュー♥ムニュー♥と俺の腕を押さえつけてくる。

「アタシたちの学園って先生も含めて、女しかいないんだよね……寮から学校までって、このバスしかないからさあ……」

耳元によってきたギャルのくちびるがかるく耳に触れる。

「男の人に会えるチャンスってココだけなんだよ♥ちゅ♥」

「はう！」

そして、ふたたび俺のちんぽはギャルの手に握られシゴかれる。

「すご♥あんなに出したのにまだビンビンじゃん♥おじさん性欲つよすぎでしょ♥♥じゃあ……つぎは～おっぱいでサービスしてあげる♥」

「お、おっぱい！？その制服からはみでそんな爆乳で！？」

ぷるん♥

制服からはみ出た黒いブラジャー越しのやわらかそうなおっぱい。

「おじさんおっぱい大好きだよね？ずっとアタシの胸チラチラ見てるしー♥」

うっ……バレてる……

「見たい？見たいよね？J〇のおっぱい見たいよね？ね♥」

「……それは……見れるなら……見たいです……」

ニヤニヤニヤ♥

完全にもてあそばれてる.....クソ.....あーでも、マジでおっぱいデカいな
.....何かっあるんだろ.....

「Fカップだよ♥おじさん♥ほおら♥Fカップの乳首でおちんぽクリクリしてあげる
♥♥♥」

「！？なんで考えてたことバテて！？いやそれよりも！！ヤバイ♥乳首エロ
すぎだろ.....うう.....」

ぶるん♥クリクリ♥くりゅ♥たぷたぷ♥くりゅ♥クリクリ♥♥♥

「あん♥ヤバ♥乳首熱い♥おじさんのおちんぽ元気すぎ♥ね♥きもちいい？アタ
シのおっぱい気持ちいい？あああん♥♥♥乳首の先こすれる♥♥」

クリクリ♥たぶん♥たぶん♥クリクリクリ♥くりゅ♥くちゅ♥くぷぷ♥♥♥

「うう.....マジでヤバイってそれ.....エロ.....亀頭と乳首がすれて.....あ♥
あ♥.....」

くりゅ♥くりゅる♥たっぶん♥たっぷ♥クリクリクリ♥♥♥くりゅ♥くちゅ♥

「やだあ♥おじさん♥まさか乳首でこすられただけでイっちゃうの？情けないち
んぽお♥♥♥」

くりゅ♥くりゅ♥♥♥くぷぷ♥♥♥

「まだパイズリもしてないんだよ？乳首チューだけで、どぴゅどぴゅ♥しちゃう
情けないちんぽなんだあ♥」

くりゅ♥くぷぷ♥♥♥クリクリクリ♥ちゅぷ♥♥♥たぶんたっぶん♥クリクリ♥

「うう.....だって.....巨乳が.....Fカップの爆乳がゆれて、乳首がヤバいとこ
.....あ！あ！出る！乳首ズリだけで射精しちゃう！」

くりゅくりゅ♥♥♥くっぷうう♥♥♥たぽたぽ♥クリクリクリ♥♥♥くちゅん♥♥♥

「あはははは♥なさけな—い♥乳首でクリクリただけでぴゅっぴゅ♥ミルクだし
ちゃうんだあ♥いいよ♥ほらアタシのおっぱいにぶっかけて♥♥♥その代わり、
そんな早漏ちんぽにパイズリは無しね♥」

「そんな……うう……ダメだ♥もう……あ♥ああああ♥♥♥♥出る！！」

くりゅ♥♥♥たぷちゅ♥くりゅん♥♥♥びゅ♥びゅるるる♥♥♥クリクリクリ♥♥♥ビュル
ビュル♥♥♥

「あああん♥残念♥乳首ズリで射精しちゃう情けないちんぽには、罰ゲーム
で一す♥♥♥えい♥♥♥」

どびゅ♥たぴゅうう♥♥♥たぽたぽ♥♥♥ふにゅうう♥♥♥

「うう！！おっぱいが！射精してるちんぽ飲み込んでいく！？」

たぴゅ♥どびゅ♥ふにゅふにゅ♥♥♥ふくくうう♥♥♥♥ぬちゃ♥たぴゅ♥

「あああん♥熱い♥♥♥おっぱいのナカすっごい熱いよおじさん♥ほら♥このまま
パイズリでも搾り取ってあげる♥♥♥覚悟してね♥♥♥ああん♥」

たぴゅたぴゅ♥♥♥ぬぽぽぽ♥♥♥ぬぴゅん♥♥♥タプタプ♥♥♥くぽ♥

「ヤバイ！ヤバイって！おっぱい弾力があってヤバすぎる！とける！ちんぽ
とけるって！」

「ちょっと……静かにしてよ……友達にバレちゃうでしょ？そうそう♥口塞いで
♥ふふん♥そんなにアタシのおっぱい気持ちいいんだあ♥♥♥」

たぴゅ♥たふん♥♥♥たふたふ♥♥♥くにゅう♥♥♥たっぴゅ♥たぽ♥

「いい……いいです……あーやば……すげえこれが、Fカップのパイズリか
……うう♥」

「ちょっとおじさん♥ウケるんだけど♥なに感動してるわけ？アタシのパイズリ
で？あははは♥じゃあ、こういうのはどう？」

ずりゆりゆりゆう♥♥♥くふうふう♥♥♥♥

「うう♥そんな！両手でめいっぱいおっぱい挟んできたら！すげえ締まる！
乳マンコで搾精される！」

くっふう♥っくうふ♥くぽくぽくぽ♥♥♥くりゆ♥むにゆ♥くぽぽぽ♥♥♥

「やだ♥パイズリなのにい♥おじさん自分で腰振ってんじゃん♥♥♥」

「うう……だって……」

ずりずり♥♥♥くぽぽぽ♥♥♥ぱちゅぱちゅん♥♥♥

「おっぱいをおマンコと勘違いしてるわけ？やばすぎでしょ♥♥♥どんだけ種付けしたいのよ♥♥♥あはは♥」

くっぽ♥くっぽ♥くぽぽぽおおお♥♥♥ぱちゅん♥たぴゅ♥たぽ♥むにゆうう
う♥♥♥むぎゅうう♥♥♥くぽくぽくぽ♥♥♥♥

やわらかい！そのうえほど良い弾力があって！ちんぽに吸い付いてくる！

「な、なんとでも言えよ……ああ……やばい……また……出る！乳マンコに出す！！」

くふうふう♥♥♥くぽくぽ♥♥♥たっぴゅん♥♥♥たぽたぽ♥♥♥くにゆ♥むにゆ♥たぽた
ぽ♥くぽくぽ♥くぽ！！

「やだ♥また大きくなってら♥♥♥ほんきでセックスしてるつもりい？ヤツバ♥♥♥
ああん♥熱い♥♥♥」

くふうふうふう♥♥♥きゅふ♥たぽたぽたぽ♥♥♥くびゆる♥♥♥

「ああ……もう……」



「イっちゃえ♥イっちゃえ♥パイズリをセックスと勘違いしちゃうようなおサルさんは、おっぱいのナカで情けなく射精しちゃえ♥ほらイっちゃえ♥♥♥♥」

「うう♥でるう♥ギャルの爆乳乳マンコに中出しする！！孕め！おっぱいで俺の子孕めよ！おらああ♥」

たっぶん♥♥♥どぴゅ♥たぽたぽ♥くぽぽぽおおお♥♥♥どぴゅどぴゅる♥♥♥
びゅびゅううう♥♥♥♥たふたふ♥たっぴゅ♥♥♥びゅるる♥♥♥たぽたぽ♥♥♥くぽ
ん♥♥♥びゅびゅううう♥♥♥♥

「あああああん♥♥♥熱い♥すごい♥おじさん精液だしすぎ♥♥♥おっぱいか
らはみでちゃう♥♥♥あああん♥♥♥やっぱあ♥マジで孕ませようって必死じゃ
ん♥♥♥あははは♥♥♥」

「はあはあ……やばかった……もう……でない……」

たぷううう♥♥♥にゅぽん♥♥♥

ギャルのおっぱいからようやく解放された俺のちんぽは、ぐったりしていた。

「つぎは、〇〇商事前～〇〇商事前～お降りの方はお知らせください」

「やばい！俺の降りるところだ！」

あわてて降車のボタンを押そうとする手をギャルが止めた。

「ダメだよお♥今ボタン押したら、みんなにこの姿見られちゃうよ？」

「へ？はっ！」

ズボンから萎えてはいるが、精液まみれのちんぽを晒した社員がバスに
いたら確実に通報されてしまう！

「慌てなくても、まだ大丈夫だからさ♥はあん♥♥ちゅぽ♥」

「おい？うう！！」

ギャルは精液まみれの俺のちんぽをきれいになめていく。

ちゅちゅ♥ちゅぽ♥れろれろ♥ちゅうう♥♥♥

「んちゅ♥はあ♥ハイ♥きれいになったよおじさん♥」

「あ、ありがとう……っていうか……また勃起しちゃったんだけど」

「もう、わがまま言わないでよ……ほら……そのまま行きなよ♥」

俺は股間を隠しつつ降車ボタンを押して、出口に向かう。

「え？なに？男の人のってたの？」

「なんかイカ臭くない？」

「ちょっと！当たってる！」

「すみませんすみません……ちょっと通してください……」

俺は必死に勃起したちんぽを抑えながら、女生徒たちの間をかきわけていく。

甘い香りと、時々当たる柔らかな感触に股間がさらに膨れ上がってしまう。

「クソ……なんでこんな目に……」

チラリと振り向き一番後ろの席を見れば、あのギャルがスマホを指さしニヤニヤ笑っている。

「しまった……動画消してもらってない！」

明日もこのバスに乗らなければならないのか……

2. 会社帰り満員のバスの中で、汗臭い部活帰りのブルマ集団にまぎれて、ギャルと初セックス。

「ふう……今日も仕事終了」

久しぶりの定時就業で、俺は帰りのバスを待つ。

帰って買い置きのビールを飲みながら、ネットゲームやれるぞー。

足取りも軽く、やってきたバスに乗り込む……だが……

「あ、ヤバい……」

そのバスはすでに女学生で満席だったのだ。

そう……このバスは帰りも女学園の生徒でいっぱいになるのだ。

「あ、降りますー」

朝みたいに通路までびっしり人で埋まっはいない。

だが……またあのギャルみたいな奴に絡まれれば、今度こそ逮捕されてしまう。

「仕方ない……金はかかるけど、今日はタクシーで帰ろう……ってあれ？」

「あれー？おじさんじゃん♥今帰り？」

俺の後ろから、朝あった金髪ギャルが乗り込んできた。

しかも、パツツンパツツンの体操着とブルマ姿で……

「な、なんでお前がここから乗り込んでくるんだよ！？」

「部活で、ランニングしてたの。いいからさ、早く乗ってくんない？後ろもいっぱいいるからさ♥」

「え？」

ギャルの後ろから同じくパツツンパツツンの体操着と、ブルマ姿の女学園の生徒たちが乗り込んでくる。

「あー疲れたあ〜」

「ちょっとお……早く乗ってよ～おじさん！」

「いや、俺はここで降りるから！うわああああ！」

体操着姿の少女たちに押されながら、結局俺はバスの一番後ろまでおいやられるのだった。

むにゅうう♥♥♥むにゅ♥ぷにゅ♥くにゅ♥

「うう……なぜだ、なぜこうなった……」

体操着の美少女たちに挟まれて、身動きが取れない。

「はあ……朝より混んじゃってるね。ここバス少ないから……でも♥またおじさんに会えてちょーラッキー♥」

そして、金髪ギャルはなぜか俺の目の前で爆乳を押し付けている。

むにゅうう♥♥♥むにゅむにゅ♥むにゅ♥

それだけじゃない……腕にも背中にも……やわらかなおっぱいの感触が！

満員のバスの中、体操着から押し当てられるおっぱい。

それに……

むわ♥むわああああ♥♥♥むああああ♥♥♥



「ごめんね～おじさん♥アタシたち汗臭いでしょ？」

「い、いや別に……気にならないが……」

むああああ♥むああああああ♥♥♥♥ムンムン♥むああああ♥♥♥

気になるううう！たしかに臭いかもしれん！

だが！甘い女の子の臭いと合わさった香りは、まさにフェロモンだ！！

「スンスン……はあはあ……やば……勃起してきた……」

「え？おじさんなんか言った？」

ぷにゆうううう♥♥♥むにゆうう♥♥♥

いちいち、弾力のあるおっぱいを押し付けながら、上目遣いに俺を見上げてくるギャル。……こいつ、誘ってんのか？

「あ、ちなみに……今ノーブラなんだあ♥ほらわかる？きゃん！？」

白い体操着を押し上げるボッチを見た瞬間、俺の理性と勃起ちんぽは解放されてしまった。

くにゆ♥くにゆううう♥♥♥スリスリ♥くにゆ♥

「お……おじさん……やば♥やばいって♥おマンコに勃起ちんぽ当たってる♥」

「す、すまん！これは、生理現象なんだ！体操着姿の汗臭いギャルがノーブラでおっぱい押し付けてきたら誰でもこうなる！！」

むにゆ♥むぎゅうう♥♥♥むにゆううう♥♥♥

ああ……よく見たらまわりの女の子たちも、ノーブラじゃないか……

ビクン♥ビクビクン♥♥♥

「おじさん……サイテー。いま、他の娘のノーブラおっぱいに反応したでしょ？ちゃんとアタシのおっぱいも見てよ。クラスで一番大きいんだからね！」

むにゆ♥むにゆううう♥♥クリクリ♥♥♥むぎゅ♥クリクリクリ♥♥♥

あ……やば……朝、ちんぽを抜いてくれた乳首をクリクリ擦りつけてくる。

2話サンプルEND

3. ギャルを探すバスの中で、黒髪巨乳の風紀委員長からちんぽをパイズリ検査される。

翌朝、結局俺は同じバスに乗り込んでしまっていた。

けして金髪ギャルからの、「また明日ね♥」という言葉につられたわけではない。

あのちんぽを勃起させて、ギャルの口をふさいでいる動画を消してもらうためにだ！

「昨日と同じ、ここでいいかな？」

俺はバスの一番後ろ、窓際の席に腰かけて、女生徒たちが乗り込んでくるのを待った。

「女子寮前～女子寮前～」

停車したバスのアナウンスのあとで扉が開き、昨日と同じく女の子たちが乗り込んでくる。

そして、俺の隣に彼女が来た……

「あの……隣いいでしょうか？」

俺の隣に来たのは、黒髪ロングの清楚な女生徒だった。

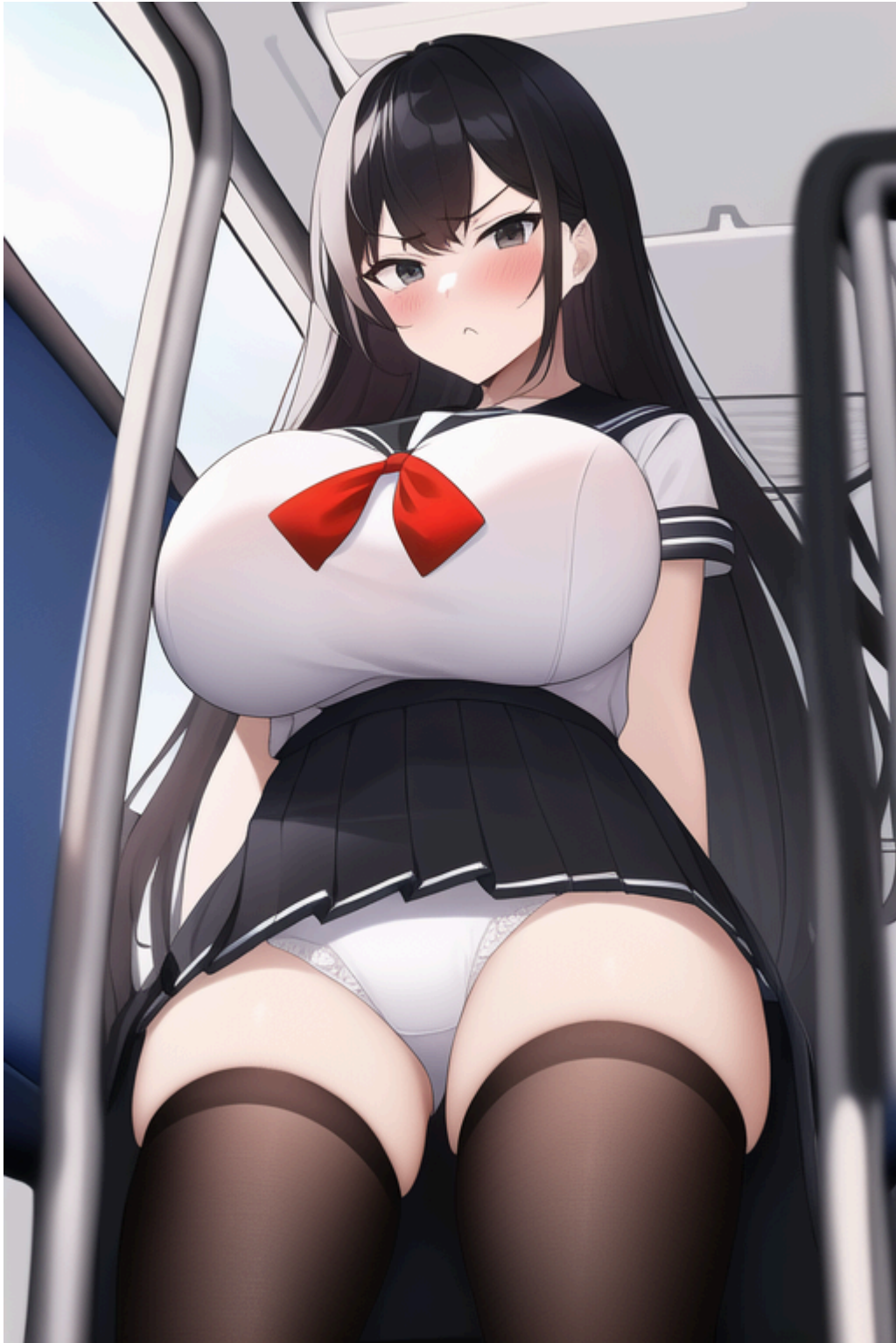
「あ、はい……」

あれ？金髪ギャルは？

いかにも委員長というかんじの女生徒、間違っても金髪ギャルの友達ではなさそうだ……

「ありがとうございます……」

そういうと、黒髪委員長は爆乳をゆらして俺の隣に座ったのだ。



横目で見ると爆乳は金髪ギャルにも負けてはいない。大人しそうなのに、すごいエロ乳を持った委員長である。

しかし、今はそれどころではないのだ！ギャルは？あのギャルはどこだ！？

「あれ？昨日また明日ね♥って言ってたのに……他の席にいるのかな？」

キョロキョロ辺りを見渡すが、それらしい女の子はいない。

「いないな……あいつ休みなのかな……うーん、いないよな？……」

なんだろう……この気持ち……もやもやする……

まさか……俺と登校するのが嫌で、別の時間に乗ったとかじゃないよな！？

クソ！今日も期待して勃起している朝立ちちんぽをどうすりゃいいんだよ！

「あのう……誰か探しているんですか？」

隣に座った黒髪の委員長が、俺に声をかけてくる。

「は！？え？いえ……あの……昨日そこに座っていた金髪の女の子って、今日は？」

少し迷ったが、委員長に聞いてしまう。すると……

「！？やっぱり、あなた昨日の痴漢ですね！！」

うわあああああ！

そして俺は思わず、委員長の口をふさぐ。

「ふぐ！？んぐ！」

「落ち着いて、昨日のはちがうんだ！あれは、あの子が俺を襲ってきたの！わかる？わかるよね？俺は被害者なんだ！昨日もそう、そんなふうに関俺をスマホで撮影して……あ……」

委員長の手にはスマホが握られていた。

そして、俺が彼女の口をふさいでちんぽを勃起させている姿がまたも撮影されていたのだ。

こうして俺は、黒髪の爆乳委員長にも弱みを握られることになったのだ……

「はあ……話は分かりました。ですが、あなたの話だけを信じるわけにはいきませんから！」

「はい、もちろんです……」

俺は、委員長に叱られていた。女学生にサラリーマンが叱られている……情けない……

「あの子、今日は腹痛で休みですけど。まったく……とんでもない子です。こんな汚らわしい男性器をおっぱいで挟んで射精させるなんて……」

全部見られていたんだ……ってかあれ？委員長さん？俺のちんぽ触っているんですけど……

「汚らわしい……こんなに大きくて……硬くて♥はあん♥オスの臭い……すごい♥」

隣りに座ったまま、左手で俺のちんぽをさわさわ♥と触りまくる委員長。

「こんないやらしい勃起ちんぽが、女学園の生徒たちが乗るバスに乗り込んでくるなんて……他の生徒が妊娠したらどうするんですか！」

「いや、そんな一緒のバスにのってるだけで妊娠なんてそんな……」

ぎゅむ！！

「ひゃ！？ちんぽ握りつぶされる！！」

ジッパーが降ろされて、勃起ちんぽが解放されてしまう。



「すご……なんていやらしい……こんな凶器を隠してバスに乗っていたなんて……犯罪ですよ！」

「無茶言うな！男なら誰でも持ってるだろうが！はう！」

「信用できるわけないでしょ！？痴漢の言うことなんて！とにかく、この勃起ちんぽは、風紀委員長である私が処理しますから！」

「あ、やっぱり委員長だったんだ……って！？ええ！」

くりゅ♡くりゅりゅ♡♡♡シコシコシコ♡♡♡♡

ちんぽの先が撫で回される。委員長の白くて柔らかな手が、俺の亀頭をくりゅくりゅ♡と押しつけ、もみあげ、指先でシゴきあげる。

3話サンプルEND

4. ちんぽのボッキ動画をネタに巨乳委員長が、寝取りセックスを迫ってくる。

「また……乗ってしまった。」

帰りのバスは、やはり朝ほどこんでいないが席はほぼ満席だった。

ガヤガヤと華やかでにぎやかな、女学園の生徒たちの声であふれている。

そして、その一番奥の席で……

「やはり、待っていたか……」

黒髪の爆乳委員長が手招きをしている。

「ちゃんと来てくれたんですね♥おじさん♥」

委員長が確保していた後ろの左端の席に座らされる。

「動画……消してくれよ。頼むよ……条件は飲むから……」

走り出したバスの外を眺めながら俺はつぶやく。

「ふーん♥それって♥」

委員長の手が俺の股間をさわさわとなでてくる。

「私を気持ちよくさせてくれるって事ですよね？……うわ♥すごくおおきくなってる♥」

委員長の制服のすきまからのぞく白い胸の谷間、肉付きの良い身体、そして、デカイ尻が俺の膝の上に乗る。

「エロいことばかり言いやがって……最近のJ○はなに考えてんだよ！」



「ひゃん♥やだ♥おじさん♥手がいやらしいよお……」

朝はされるがままだったおっぱいをわしづかみにして、ゆっくりともみしだく。

ふにゆうう♥ふにゆふにゆ♥もにゆ♥

「やわらかい！すげえやわらかい！何食ったらこんなエロい身体になるんだよ！はあはあ♥」

ふにゆふにゆ♥ふにゆうう♥ぎゆ♥

「はあはあ♥おじさん♥臭いかがないで……ああん♥おっぱいきもちいい……そこ♥ダメ♥乳首……や……いじめないで……あん♥」

くりくり♥ふにゆうう♥ふにゆふにゆ♥くりくりくゆ♥

「おっぱいはやわらかいくせに、乳首だけはすげえ硬くしやがって……うわ……下乳の重さやばいぞ……たふたふしてやがる……この乳で俺のちんぽは搾精されたのかよ……」

たふたふ♥ふにゆん♥くりくり♥たぽたぽ♥♥ふにゆんふにゆん♥

「あ♥ああ♥おじさん♥ダメです♥おっぱいばかり♥イジらないで……いじめないで……私の股間にあたってる♥おちんぽも♥苦しそうだよ♥」

そう言いながら、委員長は自分からデカイケツをふり、俺のちんぽをパンツ越しにシゴイてくる。

いつのまにかジッパーは下げられて、はみでたちんぽに直接委員長の重みと股間の熱さが伝わってくるのだ。

「お前だって、早く入れたくて我慢できないんだろ？マンコからいやらしい汁が垂れてきてるぞ？」

スリスリ♥にゆふ♥スリスリ♥ぬふ♥

白いパンツを汚してもなお、俺のちんぽへの股間マーキングがやめられない委員長。

「だって……だって……今日一日ずっと欲しかったんだもん♥おじさんのちんぽ♥授業の間……ペンとか入れてみたけど……ぜんぜんたんないよ！これが♥これがほしいの♥おじさんのおちんぽがずっとほしかったのツ♥♥♥♥♥」

ずぷ♥ずぷぷふうふう♥♥♥♥♥♥♥♥

「お！おい！？」

「はああああああん♥♥♥♥♥♥♥♥はいつた♥はいつちやつたああ♥♥♥♥♥♥♥♥おじさんのちんぽ♥私の処女あげちゃったあ♥♥♥♥♥♥♥♥あひ♥」

入れやがった……こいつ……勢いで俺のちんぽ勝手に……しかも、処女だと！？もう知らん！

ぐぷぐぷぷふう♥♥♥♥♥♥♥♥ぐぷぐっぷ♥♥♥♥♥♥♥♥

「あひ♥硬い♥熱い♥やばすぎるよおお♥♥♥♥♥♥♥♥おじさんのおちんぽすごいよおお♥♥♥♥♥♥♥♥」

「気持ちいいか？お望みのちんぽだぞ？いやらしく腰振りやがって……一体どんな教育受けたらこんな淫乱なJ○になるんだよ！風紀乱れまくりだろうが！」

「ああああん♥だってえ♥J○はあ♥きもちいいこと大好きなんだもん♥ねえ……あの子とどっちがいい？」

ぐっぷ♥ぐっぴゅぴゅ♥♥♥♥♥♥♥♥ぐふうふう♥♥♥♥♥♥♥♥ぐっぷぐっぷう♥♥♥♥♥♥♥♥

「く……クソ……生意気なこと言いやがって……お仕置きだ！！」

4話サンプル END

5. バスの中が修羅場に！？ギャルvs委員長、ふたりの痴女生徒が容赦なく搾精してくる。

「ほんと、サイアク何だけど……せっかくおじさんのために制服まで着て探しに来たのに……」

完全に不機嫌なギャルが、俺をにらみつけてくる。

「おじさん困ってるでしょ、離しなさい！」

痛いほどに俺の腕を掴む委員長がギャルをにらみつけている。

「はあ？あんたおじさん寝取る気？おじさんはね毎朝、あたしとセックスするためにこのバスに乗ってるの！」

「いや、会社に行くためだよ……」

「昨日まではそうかもしれないけど、今はどうかなあ？ね♥おじさん♥私とセックスするためにバスに乗っていますよね？♥♥♥」

「今は家に帰るためだって……」

「おじさんは黙ってて！動画SNSに流すわよ！！」

怖い！……最近のJ○怖い！！

ププー。

バスのクラクションが試合開始のゴングみたいに鳴った。

「ふざけるんじゃないわよ！おじさんはあたしのおっぱいが大好きなの！ね♥おじさん♥♥♥」

「えー♥私のおっぱいに夢中なんですよ♥おじさん♥♥♥」

俺たちしか乗っていないバスで、痴話ゲンカはエスカレートしていく。

もう、面倒なので押し付けられる爆乳の感触だけに集中するのだ。



ああ.....ふにふにのギャルパイ♥

おお.....ふにゆふにゆの委員長パイ♥

ううむ.....心地いい、どちらかなんて選べないぞ.....

「もう♥おじさん？ちゃんと聞ってる？もう♥ほんとおっぱい大好きなんだから♥♥」

「そうですよ♥おじさん♥しっかりしてください♥ふふふ♥かわいいです♥」

うぷ♥顔に押し当てられる爆乳で我に返る。

「はっ！？」

いつの間にか、制服をたくしあげられたふたりのおっぱいに両側から挟まれていたのだ。

「あ、あのそれで……俺はどうなっちゃうの～かな～？なんて」

ふにゆふにゆう♥♥♥♥ふにゆふにゆう♥♥♥

やわらかなおっぱい目隠しされながら、おそろおそろ聞いてみた。

「もう♥だからあ♥おじさんはあたしたち、ふたりのモノになったの♥」

「そうです♥ちゃんと中出した責任とって毎朝、毎晩、私達といっしょに通勤通学するんですよ♥」

「え？それって……毎日、搾精されるって話ですよ？」

ふにゆう♥♥♥♥ふにゆう♥♥♥♥

返事の代わりに、顔がおっぱいでもみくちやにされる。

「すご♥もう勃起してきました♥」

「おじさんおっぱい大好きだもんね♥それじゃあふたりでパイズリしてあげるね♥」

ギャルが制服をたくしあげて、おっぱいをさらけ出す。

ツンと上を向いた桃色の乳首、弾力とインパクト抜群の爆乳がぼよよん♥と揺れた。

「私のおっぱいも、見てください♥おじさん♥」

委員長もおっぱいを強調するように、下乳をささえる。

ふにゆりと重力に逆らえない大きさの爆乳が手の上でプリンみたいにぽよぽよ♥と揺れている。

「「あん♥ああああん♥♥♥」」

そのおっぱいどうしを迎え合わせて、押し付けあうJ〇たち……

「風紀委員のくせに委員長のおっぱいやわらかすぎよ！このエロ乳！」

「あなたこそ！おっぱいすっごく押し返してくるじゃない！いやらしい爆乳ね！」

おたがいのおっぱいを罵りあいながら、エロ乳をさらにぶつけ合うふたり。

「ふあ♥あふ♥」

「んう……いい♥」

やがて乳首がかくれるほどに密着した4つの膨らみが、俺のちんぽに狙いを定めてゆっくり降りてくる。

くぽ♥くぷぷふうふう♥♥♥ふにゆうふう♥♥♥

「うう♥やばい♥パイズリなんてレベルじゃねえぞ……」

完全に密着したおっぱいがちんぽに吸い付いてくる。

くぽぽぽおお♥♥ぷにゆうふう♥♥♥ふにゆうふう♥♥♥

「あああ♥ああああ♥ヤバって！パイズリ乳マンコ.....うう.....また搾精される！！」



くぴゅぴゅぴゅぴゅうう♥♥♥にゅこにゅこ♥ふにゅ♥ぷにゅ♥にゅこにゅこにゅこ
おお♥♥♥♥くぷ♥

「ああん♥おじさんのおちんぽ元気すぎ♥やっぱ♥あたしたちのWパイズリ♥どう？気持ちいいでしょ？」

「ふああん♥大きくて熱すぎます♥おっぱい気持ちいい？ね♥おじさん気持ちいいですか？Wパイズリいいですか？」

5話サンプル END

気に入っていただけましたら
製品版もよろしく願いいたします。

**この作品はフィクションです。
実在の人物・団体・事件とは一切関係がありません。**

18歳未満の方の閲覧はご遠慮ください。

**無断転載・複製・複写・Web上への掲載
(SNS・ネットオークション・フリマアプリ含む)
は禁止です。**

読者のみなさん、こんばんは～
ヘンタイ小説家のエロバトルンです。



作品のジャンルは
「凌辱」「復讐もの」「ざまあ」「敵女」
または、「男性受け」「おねショ●」「ふたなり」
などです。

わたしの作品を
最後まで読んでいただき
ありがとうございました。

よろしければ、フォローや
高評価、お気に入り登録を
お願いします！

感想レビューで、気に入った
ヒロインの名前を
ぜひ教えてください！

twitterで情報更新中です。
こちらもフォローを
よろしくお願いします。



🔍 エロバトルン 検索

*ご注意CGのみAI生成を使用しています。

[エロバトルン - pixiv](#)

<https://twitter.com/furizumu>

